

ラフカディオ・ハーンの間人観(2)マンディ ヴィルの『蜂の寓話』をめぐって:東京帝国 大学英文科講師時代の講義録から

先川, 暢郎

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

103

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

87

(発行年 / Year)

1998-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004788>

ラフカディオ・ハーンの人間観 (2)

——マンディヴィルの『蜂の寓話』をめぐって：
東京帝国大学英文科講師時代の講義録から——

先 川 暢 郎

1. はじめに

ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn: 1850-1904) は東京帝国大学英文科講師時代に英文学・英文学史の講義をおこなっているが、そのときの講義にもとづいた著作に『英文学史』、『人生と文学』、『詩論・詩人論』、『文学の解釈』、『英文学畸人列伝・シェークスピア論・その他』等がある。

これらの著作のうちの『英文学史 I』⁽¹⁾の「古典時代の散文」という題目の中で、18世紀前半はイギリスの散文の発達に大きな変化がみられ、イギリスの散文はこの時代が一番すぐれた時代であり、たくさんのエッセイストや自由思想家が現れたと述べている。そして、思想家としてはフランスのような大物はひとりもないとしながらも、シャフツベリ (Anthony Ashley Cooper, 3rd Earl Shaftesbury: 1671-1713)、ボリンブルック (Henry Saint, 1st Viscount of Bolingbroke: 1678-1751)、ティンダル (Mathew Tindal: 1657-1733)、トーランド (John Toland: 1670-1722) 等の名前をあげている。そのうちでシャフツベリについては名前を覚えておく程度でよいとしており、ボリンブルックについては今は読む者はいないと述べているが、変わり種としてオランダに生まれ、後にイギリスに定住したバーナード・マンディヴィル (Bernard Mandeville: 1670-1733) をとりあげて、どうしても無視できないとしている。

また、風変わりな作家・思想家をとりあげている『英文学畸人列伝シェークスピア論・その他』⁽²⁾においても、マンディヴィルは偉大な思想家であると礼賛している様子がうかがわれるのである。この理由について考察してみたい。

2. マンディヴィルについて

(1) 生いたち

マンディヴィルは代々優秀な医者を出している家系に1670年11月20日にロッテルダムで生まれ⁽³⁾、1685年にライデン大学医学部に入学し、翌年には哲学をも専攻し⁽⁴⁾、1689年には医学兼哲学の教授であったフォルダー（Burcherus de Volder）のもとで「動物の自動的行為に関する哲学的研究（Disputatio Philosophica de Brutorum Operationibus）」という論文を書きあげる⁽⁵⁾一方、1691年に医学博士となり神経及び消化器系の医者を開業した⁽⁶⁾。その後、20歳代で英語の勉強のためにロンドンにわたり⁽⁷⁾、帰化してイギリス人となり、1699年にはイギリス人のルース・エリザベス・ローレンス（Ruth Elizabeth Lawrence）と結婚し⁽⁸⁾、二人の子供をもうけ、ロンドンで医者を開業した⁽⁹⁾。その間、1705年には「ブンブンうなる蜂の巣—悪者が正直者になる話（The Grumbling Hive, or Knaves Turn'd Honest）」という諷刺詩を匿名で発表し⁽¹⁰⁾、1714年には、この諷刺詩をもとにした『蜂の寓話—私悪すなわち公益（The Fable of The Bees ; or Private Vices, Publick Benefits）』に「緒言」, 「ブンブンうなる蜂の巣」, 「序文」, 「美德の起源についての考察（An Enquiry into the Origin of Moral Virtue）」, 20項目の「注釈」から成る内容をつけて出版し⁽¹¹⁾、さらに、「慈善と慈善学校における試論（An Essay on Charity, and Charity-Schools）」, 「社会の本質についての研究（A Search into the Nature of Society）」, 「索引」, 大はばに増やした「注釈」を新たにつけ加えて1723年に出版した⁽¹²⁾。すると、世間からは注目を浴びると同時に非難の声があがり、ミドルセックス州の大陪審によって告発された⁽¹³⁾。そして、1724年には「本書の弁明（A Vindication of the Book）」, 「ミドルセックス州大陪審の告発（a Prefentment of the Grand-Jury of Middlesex）」, 「C閣下への誹謗の書簡（an abusive Letter to Lord C）」がつけ加えられた⁽¹⁴⁾。さらに、1729年には『蜂の寓話II（The Fable of The Bees II）』を出版した⁽¹⁵⁾。

その後、1733年にロンドンで流行性のインフルエンザのために亡くなった。マンディヴィルの死についてロンドンの新聞は次のように報じた⁽¹⁶⁾。

去る日曜日の朝、ハックニーにて医学博士バーナード・マンディヴィル

逝す。享年六三歳。博士は『蜂の寓話』、『ヒポコンデリーおよびヒステリア論』⁽¹⁷⁾、その他幾つかの奇書の著者であり、その若干は外国語で出版されている。かれは天文に恵まれ、機智に富み、判断力において優れていた。古入學に通暁し、哲学の多くの部門に優れた力量をもち、人間本性の奇妙な探求者であった。こうした造詣は、博士をして面白い貴重な話し相手となし、また有識の文筆家たちの尊敬をよく得させたのであった。職業においては仁愛の人情味の豊かなるをもって人に知られ、私人としての性格においては誠実な友であり、また生涯のあらゆるおこないにおいて非常に廉直にして高潔な紳士であった。

(2) 17世紀から18世紀にかけてのオランダの時代思潮

マンディヴィルの生きた時代背景として、まず、当時のオランダについてみると、オランダは1579年にスペイン絶対君主制の専制から独立した後⁽¹⁸⁾17世紀に大きな発展をしたが⁽¹⁹⁾、これは東西インド会社の経営、植民地拡大政策による植民地経営⁽²⁰⁾海運・造船業、漁業、毛織物、農産物といったものの国際的仲継貿易システムを基盤としたものであり⁽²¹⁾、ポルトガル・スペインにかわって世界貿易の覇者となった⁽²²⁾。そして、新大陸においてはスペイン領への進出、アジアにおいてはジャワ、セイロン、ペルシャ、中国、日本、台湾にいたる旧ポルトガルの商権の大部分を独占した⁽²³⁾。

また、文化の面においても、スピノザ（Baruch de Spinoza: 1632-1677）がこの時代のオランダの繁栄の原因として自由をあげているように⁽²⁴⁾、自由で寛容なオランダの風土は多くの外国人や亡命者を引きよせ⁽²⁵⁾、とりわけ、思想・信仰の自由は当時のヨーロッパにはみられないほど進んでおり、宗教的亡命者や多くの文化人の聖地とまで言わせしめたのである⁽²⁶⁾。

この時期にオランダにやって来た文化人・思想家としては、例えば、フランス人のデカルト（René Descartes: 1596-1650）は1629年から約20年間にわたって過ごし、主要著作をまとめ哲学体系を確立し⁽²⁷⁾、また、マンディヴィルが鋭く批判したシャフツベリも一時（1698年）滞在していた⁽²⁸⁾。

一方、国内では『エチカ』、『神学政治論』の著者ではあるスピノザもこの時期に哲学体系をまとめあげているし、国際法の創始者のグロティウス（Hugo Grotius: 1583-1645）等の学者も輩出している⁽²⁹⁾。

しかし、このような経済的繁栄と自由を享受したオランダも 18 世紀を迎えるとともにイギリスの挑戦をうけて衰退の一途をたどりはじめた⁽³⁵⁾。

(3) 18 世紀前半のイギリスの時代思潮

次に、マンディヴィルが 20 代以降を過ごしたイギリスについてみていくと、オランダにかわって、18 世紀初頭より富国強兵策をかかげていたイギリスでは、アン女王（在位期間：1702-1714）が即位すると、ホイッグ党の諸政策の承認、新教徒による王位継承、信仰の自由の確保、帝国主義政策の実施などを受け入れ、1707 年にはスコットランド王国を統合し、大英帝国が成立した⁽³¹⁾。そして、アン女王の死後、ジョージ I 世（在位期間：1714-1727）が即位すると、議会政治を代表する首相に実権を与えてまかせるとい立憲君主制が確立し⁽³²⁾、1721 年には商工業者の味方であるホイッグ党のロバート・ウォルポール（Robert Wolpole: 1676-1745）内閣が成立すると、議会の多数党に基盤を置く責任内閣制度が設立し⁽³³⁾、名実ともに議会政治が確立した。そして、1742 年までの約 20 年間にわたって自由放任路線を展開した⁽³⁴⁾。

また、この時代には事実を誠実に記録するジャーナリズムが大きく進歩した⁽³⁵⁾。この精神はデフォー（Daniel Defoe: 1661-1731）の 1704 年の『レビュー（Review）』誌に始まり、1709 年のスティール（Richard Steele: 1672-1729）の『タトラー（Tatler）』誌、そして、『タトラー』誌の廃刊後、スティールとアディソン（Joseph Addison: 1672-1719）の 1711 年から 1712 年にかけての『スペクテーター（Spectator）』誌、さらに、スウィフト（Jonathan Swift: 1667-1745）の『エグザミナー（Examiner）』誌へと受けつがれていった。

一方、この時代には論証的な作品や政治経済を主題とする著作が増え、とりわけ、諷刺文学の最盛期であった⁽³⁶⁾。その大御所であるスウィフトは諷刺文学の最大の傑作である『ガリバナー旅行記（Gulliver's Travels: 1726）』や『桶物語（A tale of a Tub: 1697-1698）』、アァバスノット（John Arbuthnot: 1667-1735）は『ジョン・ブルの歴史（The History of John Bull: 1712）』、そして、デフォーは『正真正銘の英国人（The True-born Englishman: 1701）』を出版した。

3. マンディヴィルの著作『蜂の寓話』

マンディヴィルの著作『蜂の寓話—私悪すなわち公益』の中の「ブンブンうなる蜂の巣—悪者が正直者になる話」では、まず、

あるひろびろとした蜂の巣があって
奢侈と安楽に暮らす蜂でいっぱいだった。
けれども法律や武力で名高いことは
蜂の大群を早く生むことと同じだった。
その蜂の巣は学術や精励の
偉大な育成所と考えられていた。
その蜂ほどりっぱな政治に恵まれ
気まぐれで満足しがたいものはなかった。
彼らは暴政の奴隷ではないばかりか
野放しの民主主義の統治下にもなく、
法律で制限されているので
悪事ができない国王のもとにあった⁽³⁷⁾。

とあるように、広大で富裕で好戦的でしかも立憲君主国家である当時のイギリス社会を蜂の巣にたとえて描きだした後、スリ、裁判官、弁護士、農民、僧侶、軍人、大臣、占い師、食客、商工業者、博打ち、女術、医者、さらに、正義の女神にいたる人達が私欲のためにあやしい商売に熱中している様子が描かれている⁽³⁸⁾。続いて、

かように各部分は悪徳に満ちていたが
全部そろへばまさに天国であった。

……

そして美德は国家の政策から
巧みな策略を数多く学びとり、
そのめでたい影響力によって
悪徳と親しい間がらになった。

それからは全体でいちばんの悪者でさえ
公益のためにになにか役立つことをした。

……

こうして悪徳は巧妙さをはぐくみ
それが時間と精励とに結びついて、
たいへんな程度にまで生活の便益や
まことの快樂や慰安を高め、
おかげで貧乏人の生活でさえ
以前の金持ちよりよくなって
足りないものはもうなかった⁽³⁹⁾。

とあるように、各個人の悪徳こそが巧みな管理により、全体の繁栄とこの世の幸福とに寄与したこと—その悪徳の寄せ集めが全体の善、つまり、公益をもたらすこと—を示している。

続いて、「すべての人達が正直で徳性をもつようになり、国民全体の節制、無垢、満足がゆきわたりその場合の当然の結果である繁栄・幸福の消滅」を述べて、生まれつき備わっている人間の弱点がなくなれば、広大で、強力で、はなやかな社会は築けないということを証明している⁽⁴⁰⁾。

そして、マンディヴィルが自ら「緒言」で述べているように⁽⁴¹⁾、この詩は教訓として「悪徳は国家にとり必要なものであり、美德が高いことだけで国家・国民の生活を壮大にすることは不可能である」⁽⁴²⁾ ことを最後に示している。

彼は、この「寓話」の目的は「社会というじつにうるわしい機構が、もっとも卑しむべき部分から築きあげられるのを助ける、政治的な知恵の驚くべき力をほめたたえるため」⁽⁴³⁾ であると述べ、その主意は「勤勉で、富裕で、強力な国家で見られるこの上なく上品な生活の慰安をすべて享受しながら、それと同時に、黄金時代に望みうる美德や無垢をすべて恵まれることはできないことを示す」⁽⁴⁴⁾ 点にあると述べている。

このように、マンディヴィルは立派な政治による管理が働いている場合は、美德だけでは社会の進歩・発展・繁栄は不可能であると述べ、社会にとって各個人の悪徳の必要性を強調しているのである。

ところで、「人間は欲望によって奮起させられる以外、努力するものではなく、欲望が寝たままであると人間の優秀性や能力は発揮できなく、情念の影

響がないぼんやりとした機械のような人間は風が吹かないときの大きな水車のようなものである⁽⁴⁶⁾と述べて、人間の欲望を重視しているマンディヴィルは、社会の進歩・発展・繁栄と欲望・貧欲一悪（悪徳）との関連について「この世で悪と呼ばれることこそが……すべての商売や職業の賢固な土台、生命の支柱であり、……悪が消滅するとすぐに、社会はたとえ完全に崩壊しないにせよ、台なしになるに違いない⁽⁴⁶⁾」としている。

そして、彼は国を強大化し富裕にするのに必要な経済政策は「かれらの情念（欲望）にふれねばならない⁽⁴⁷⁾」述べている。

さらに、自らも「利己的な人間である⁽⁴⁸⁾」とも述べた上で、「人間はどこまでも利己的で強情な動物であり、強い力で抑制しても征順にさせることは不可能であり、また、他人の利益よりも自分の利益を追求することを優先する性質がある⁽⁴⁹⁾」と述べているのである。

このように、マンディヴィルは社会の進歩・発展・繁栄の根本原理を利己欲にあるとしているのである。

一方で、慈善と慈善制度について、「慈善があまりにも広範囲におよぶと、かならずといってよいほど怠惰や無為を助長し、のらくら者を生んで精励をそこなうほかにほとんど国家の役にたたない⁽⁵⁰⁾」としており、また、「哀れみは、……人間本性の短所である。……それ（哀れみ）は善だけではなく悪をも生みだすことがある⁽⁵¹⁾」と述べているのである。さらに、宗教をもって道徳の基礎とする伝統的なキリスト教倫理観を否定しているのである⁽⁵²⁾。

このように、マンディヴィルは慈善行為や慈善制度はかえって勤勉意欲をなくすことがあり、国家にとって無益なものであり、悪を生みだすものとなりうるとしており、伝統的なキリスト教道徳・倫理観を否定しているのである。

4. ハーンにおけるマンディヴィル

このようなマンディヴィルについて、ハーンは文章表現も稚拙で、文学的才能をもちあわせていないが、蜂の社会が道徳を無視していた時には繁栄していたが重視したとたん衰退したという内容の「ブンブンうなる蜂の巣一悪者が正直者になる話（The Grumbling Hive, or Knaves Turn'd Honest）」（1705）という諷刺詩を書き⁽⁵³⁾、人間の野心、利己心、物欲、裏切りといったものが、実際には危険なものではなくむしろ真に社会に役立つものだとすることを証明

しようと試み⁽⁵⁴⁾、悪徳の弊害と普通の道徳規準をはじめて否定した人であり、現代のニーチェに多少なりとも似ているところがあるとしているのである。そして、マンディヴィルは散文のエッセイを加えて、道徳はむしろ社会に益を与えており、悪徳の手助けなしに社会は繁栄しないと論じた『蜂の寓話—私悪すなわち公益 (The Fable of The Bees ; Private Vices, Publick Benefits)』として再び出版する⁽⁵⁵⁾と世間の注目を浴び非難の声があがったが今日こうした彼の考え方は産業化時代にあって大きな力をもってきた⁽⁵⁶⁾と述べ、社会学者ではないが、彼の見解はイギリスで道徳に関心をもつ人々や思想家たちに影響を与えたとしており、間違っていないとし、社会学上の真理を含んでいることを認めざるを得ない⁽⁵⁷⁾と述べているのである。

さらに、ハーンは「この世における善の発展は、悪の発展にもとづくところが非常に大きく、悪のない世界は、善の世界ではなく、無の世界であろう」⁽⁵⁸⁾と述べ、彼は「悪徳と悪行とを抑制することはできないことを感じとしており」しかも、「悪徳と悪行は社会に役立つものであることを認識していた」⁽⁵⁹⁾と述べているのである。

ところで、マンディヴィルの『蜂の寓話』について彼の生涯や思想などについて解説やコメントをつけ加えているケイ (F. B. Kaye) は「『蜂の寓話』においてマンディヴィルは、現在自由放任論として知られている理論を支持し、しかも明示的に支持している。……『蜂の寓話』は、わたくしの信じているところでは、自由放任論の主要な文献的源泉の一つであった」⁽⁶⁰⁾と述べている。

また、ドイツの技術史家のオットー・マイヤー (Otto Mayr) は『時計じかけのヨーロッパ—近代初期の技術と社会』の中で、『蜂の寓話』について「ごうごうたる非難を浴びたが、マンディヴィルが表現したのは、世間を覆いつくしているムードにほかならなかった。経済史家は『蜂の寓話』をレッセ・フェールという経済原理の初期の表現だと指摘した」⁽⁶¹⁾と述べており、また、「『蜂の寓話』が大々的に主張していることは、ごくふつうの自己本位にばかりか、間違いなく不道徳な行為にまで寛容になることである。新たな立憲政府のもとで生活したマンディヴィルは、自分の目で見た結果に触発されて、「私悪」すなわち「公益」だと断言した」⁽⁶²⁾と述べている。

一方、ハーンはハーバート・スペンサー (Herbert Spencer: 1820-1903) の思想にもとづいて道徳を説いているとしているジョージ・メレデス (George Meredith: 1828-1709) の『大地と人間』について講義をおこなっている⁽⁶³⁾が、

それに関連して、人間について「善良であっても、その人が弱い人間であっても充分といえず、善良であると同時に強くなくてはならない……人間が善良であることと強くあることのどちらがよいかと言えば、人間は強くあるほうがよい。善はその次である。……善は弱いものには決して訪れないであろう」⁽⁶⁴⁾と述べ、「柔弱なものは、どんな道徳的であっても破滅や死に向かう傾向がある」⁽⁶⁵⁾としているのである。

また、「人生は競争であり、あらゆる生物はこの競争（生存競争）に参加しなくてはならず、さもないと必ず亡びてしまう」⁽⁶⁶⁾としているハーンは、「憐憫や同情心をもたないことは恐ろしく見えることではあるが、これはより大きな生命力、高度な発展へと向かう傾向があり、こういった強さを備えつけた性質だけが、未来の道徳的な発展のための賢固な基礎を形づくるのが可能である」⁽⁶⁷⁾とも述べているのである。

5. おわりに

ハーンとマンディヴィルのかかわりについて考えてみると、ハーンは19歳で渡米し、1890年に来日するまでに約20年間にわたってアメリカで過ごしている⁽⁶⁸⁾。この時期のアメリカは南北戦争が終わり、自由競争の資本主義経済は一層成熟の段階に達し⁽⁶⁹⁾、そして、技術的發展と相まって大陸横断鉄道の完成（1869）、東部と西部を結ぶ電信・電話網の発達などもあり⁽⁷⁰⁾、また、鉄工業、農業機械、石油製品などの発展により、19世紀の末には世界第1位の工業国となった⁽⁷¹⁾。

一方、思想面においては、南北戦争直前にはいつてきたダーウィンニズムは戦後、急激に普及し、特に1880年代後半にはスペンサーの社会進化論がアメリカ人の間でもはやされ、自由競争を正当化する根拠を与えたのである⁽⁷²⁾。そして、このような時期にアメリカで過ごし、その思想にふれたハーンは、それ以来スペンサーの信奉者となったのである⁽⁷³⁾。

このようなハーンは人生は競争であり、人間は善であると同時に強くあらねばならないが、強くあることは善にまさるとし、人間は弱いということは最大の罪である⁽⁷³⁾と述べているように、スペンサーの信奉者でもあるハーンの見解はマンディヴィルの見解—人間はどこまでも利己的であり、この性質（利己心）は抑制することが不可能であるから、社会の進歩・発展・繁栄は社会を構

成している人間の利己心や欲望を自由に競争させること、つまり、それらの自由放任にあるとしている見解—と重なりあう部分が見いだせるのである。

また、マンディヴィル同様にハーンも経済的に繁栄したアメリカで約 20 年間にわたって生活し、現実の人生の裏表を体験していることも手伝って、マンディヴィルの見解は社会学上の真理が含まれており、思想家として高い評価を与え、無視できないとしたものと思われるのである。

さらに、支配を憎み、規則を嫌い、既成の権威や秩序に反感をもち⁽⁷⁵⁾、そして、キリスト教、とりわけ、旧教を嫌った⁽⁷⁶⁾ハーンは、マンディヴィルが当時の普通の道徳観—既成の伝統的な道徳的倫理観—博愛、慈善、隣人愛、哀れみなどにもとづくキリスト教の道徳観を大きな非難を浴びたにもかかわらず、はじめて否定する見解を述べたことによるということも見逃してはならない理由であると推定できるのである。

《注》

- (1) 『ラフカディオ・ハーン著作集』11巻(野中 涼・野中恵子訳)、恒文社、1981年、325-327頁。
- (2) 『ラフカディオ・ハーン著作集』10巻(由良君美他訳)、恒文社、1987年、33頁。
- (3) Kaye, F. B. "Introduction of The Fable of The Bees: Private Vices, Publick Benefits" Vol. I., Oxford, 1924, p. 17.
- (4) Ibid., p. 18.
- (5) Ibid., p. 18.
- (6) Ibid., p. 19.
- (7) Ibid., p. 19.
- (8) Ibid., p. 20.
- (9) Ibid., p. 22.
- (10) Ibid., p. 33.
- (11) Ibid., p. 33.
- (12) Ibid., p. 34.
- (13) Mandeville, Bernard "The Fable of The Bees: Private, Publick Benefits" Vol. I., Oxford, 1924, pp. 13-4.
- (14) Kaye Ibid., p. 34.
- (15) Ibid., p. 31.
- (16) Ibid., pp. 29-30.
- 田中敏弘『マンディヴィルの社会・経済思想—イギリス 18 世紀初期社会・経済思想—』、有斐閣、昭和 41 年、8 頁。
- (17) 1711 年に出版された "A Treatise of Hypochondriack and Hysterick Passions" という医学書である。

- (18) 『岩波講座世界歴史』15, 岩波書店, 1969年, 81頁。
- (19) 長谷川輝夫他『世界の歴史ヨーロッパ近世の開花』, 中央公論社, 1997年, 298頁。
- (20) 同上, 302-3頁。
秀村欣次編『西洋経済史概説』, 東京大学出版会, 1980年, 168-9頁。
- (21) 『西洋経済史講座』4巻, 330-1頁。
- (22) 『岩波講座世界歴史』15, 130頁。
- (23) 『西洋経済史講座』4巻, 344-5頁。
- (24) 工藤喜作『スピノザ』, 清水書院, 1994年, 11頁。
- (25) 『世界の歴史ヨーロッパの開花』306頁。
栗原福也監修『オランダ・ベルギー』, 新潮社, 1995年, 128頁。
- (26) 『スピノザ』, 11頁。
- (27) アドリアン・バイエ『デカルト伝』(井上義雄・井上庄七訳), 講談社, 昭和54年, 73-5頁。
岩崎武雄『西洋哲学史』, 有斐閣, 1996年, 140頁。
- (28) 平井俊彦『ロックにおける人間と社会』, ミネルヴァ書房, 1964年, 192頁。
Mandiville 前掲書, pp.323-5頁。
- (29) モーリス・ブロール『オランダ史』(西村六郎訳), 白水社, 1997年, 84頁。
- (30) 『西洋経済史講座』4巻, 328頁。
- (31) アンドレ・J・ブールド『英国史』(高山一彦・別枝達夫訳), 白水社, 1996年, 96-7頁。
『西洋経済史講座』2巻, 岩波書店, 389頁。
- (32) 秀村欣次編『西洋経済史概説』, 200頁。
- (33) 大野真弓編『イギリス史』, 山川出版, 1993年, 187頁。
- (34) 上田辰之助『蜂の寓話, 自由主義経済の根底にあるもの』, 新紀元社, 1951年, 56頁。
- (35) 『岩波講座世界歴史』22, 岩波書店, 237頁。
- (36) 『英国史』, 98頁。
- (37) Mandiville 前掲書, p.17.
- (38) Ibid., pp.18-24.
- (39) Ibid., p.24-6頁。
- (40) Ibid., pp.26-35.
- (41) Ibid., pp.3-7.
- (42) Ibid., p.37.
- (43) Ibid., pp.5-6.
- (44) Ibid., pp.6-7.
- (45) Ibid., p.184.
- (46) Ibid., p.369.
- (47) Ibid., p.184.
- (48) Kaye Ibid., p.28.
- (49) Mandeville 前掲書, pp.41-2.
- (50) Ibid., p.267.

- (51) Ibid., p. 56.
- (52) Ibid., pp. 50-1 頁。
- (53) 『ラフカディオ・ハーン著作集』11 巻, 327 頁。
- (54) 同上, 327 頁。
『ラフカディオ・ハーン著作集』10 巻, 28 頁。
- (55) 『ラフカディオ・ハーン著作集』11 巻, 327 頁。
- (56) 『ラフカディオ・ハーン著作集』10 巻, 29 頁。
- (57) 同上, 27-31 頁。
『ラフカディオ・ハーン著作集』11 巻, 327 頁。
- (58) 『ラフカディオ・ハーン著作集』10 巻, 32 頁。
- (59) 同上, 32 頁。
- (60) Kaye Ibid., pp. 139-140.
『マンディヴィルの社会・経済思想—イギリス 18 世紀初期社会・経済思想—』, 65 頁。
- (61) オットー・マイヤー (Ott Mayr) 『時計じかけのヨーロッパ—近代初期の技術と社会』(忠平美幸訳, 平凡社, 1997 年, 269 頁。
- (62) 同上, 267 頁。
- (63) 『ラフカディオ・ハーン著作集』6 巻 (池田雅之他訳), 恒文社, 1989 年, 453 頁。
- (64) 同上, 461 頁。
- (65) 同上, 461 頁。
- (66) 同上, 455 頁。
- (67) 同上, 461 頁。
- (68) 田部隆次『小泉八雲』, 北星堂, 昭和 55 年, 3 頁。
- (69) 鈴木圭介編『アメリカ経済史』, 東京大学出版会, 1972 年, 407 頁。
- (70) 有賀貞他『世界歴史大系』アメリカ史 2, 山川出版, 1993 年, 21-5 頁。
- (71) 同上, 3 頁。
- (72) 大橋健三郎他『総説アメリカ文学史』, 研究社, 1975 年, 195 頁。
- (73) 法政大学教養部「紀要」86 号, 人文科学編, 1993 年, 7-9 頁。
- (74) 『ラフカディオ・ハーン著作集』12 巻 (野中 涼・野中恵子訳), 恒文社, 1993 年, 196 頁。
- (75) 『ラフカディオ・ハーン著作集』11 巻, 480-83 頁。
『ラフカディオ・ハーン著作集』15 巻 (齊藤正二他訳), 恒文社, 1988 年, 423 頁。
- (76) 『小泉八雲』, 208-9 頁。
『ラフカディオ・ハーン著作集』14 巻 (齊藤正二他訳), 恒文社, 1983 年, 500-1 頁。
『ラフカディオ・ハーン著作集』15 巻, 426 頁。

尚, Mandeville, Bernard "The Fable of The Bees: Private Vices, Publick Benefits" Vol. I., Oxford, 1924 年版の邦訳は泉谷治訳『蜂の寓話—私悪すなわち公益』(法政大学出版局, 1995 年)を使用

その他の参考図書

- 1) イギリス文学・文化研究所編『イギリス文学ガイド』, 荒地出版, 1997年。
- 2) 竹内靖雄『経済思想の巨人たち』, 新潮社, 1997年。
- 3) 石垣昭雄, 他『新版西洋経済史』, 有斐閣, 1996年。
- 4) 川崎俊彦『イギリス文学史入門』, 研究社, 1995年。
- 5) 相島倫嘉『イギリス文学の流れ』, 南雲堂, 1994年。
- 6) D. C. ノース/R. P. トマス『西欧世界の勃興』(速水融・穂本洋哉訳), ミネルヴァ書房, 1994年。
- 7) 平井俊彦編『社会思想史を学ぶ人のために』, 世界思想社, 1994年。
- 8) ルネ・ラルー『英文学史』(吉田健一訳), 白水社, 1993年。
- 9) 木村尚三郎・本間長世編『概説西洋史』, 有斐閣, 1986年。
- 10) ブロイデン・タール『スピノザの生涯』(工藤喜作訳), 哲書房, 1982年。
- 11) 湯浅赴男『世界の哲学・思想のすべて』, 日本文芸社, 平成9年。
- 12) 斎藤 勇『英文学史概説』, 研究社, 昭和48年。